里山の植生は文化的所産

報告:下田 孝 (2012・7・22)

主催:NPO 法人「山の自然学クラブ」

講師・現地案内:信州大学農学部講師・中堀謙二先生

日時・場所:2012・6・9-10、長野県八ヶ岳山麓御射池周辺と霧ヶ峰高原

1 日本の森林は江戸時代 - 明治初期に比べて現在は増えている。 浮世絵など江戸時代の絵画を見ると、山にあまり木が茂っていない。

- 2 山:生活資源 森:山と人里の中間の祈りの地 林:杉・檜・松などの群生地
- 3 「山」から得る生活資源:薪炭(エネルギー)、刈敷(肥料)、牛馬飼料→厩肥 高度成長期以降、これらが全て「不要」になってしまった。
- 4 霧ヶ峰の頂上付近は草原になっているが、太古の昔から草原だったのではない。 遅くとも江戸時代までには、この山は馬の飼料を採るための採草地として利用され維持されることで、草原の山となった。昭和 40 年代初頭までその状況は維持されてきた。高度成長期になって、採草地が不要になり放置された。そこには白樺をはじめとした木々が成長を始めた。やがて「観光資源として霧ヶ峰の頂上はやはり草原でないと・・・」という意見が強くなり、現在では、ボランティアを含めた人手で、生えてきた樹木は伐採し、草原の維持管理に努めている。

<信州の馬と高句麗からの渡来人>

「石積型」古墳:日本に約1500基あり、うち900基が信濃国にあり、うち500基が「大室古墳群」にある。この古墳の形式は高句麗に多く見られる。6世紀後半以降、高句麗が隋・唐に攻められて国力が衰退しはじめた時期に、日本に渡来してきた高句麗移民を、大和朝廷が信州に居住させ、馬を飼育し献上させた。その人々の墓だとみなされている。

<青木が原樹海の変遷と利用の歴史>

青木が原の溶岩流は平安時代延暦 - 貞観年間(800-865年)の富士山の噴火で誕生。 現在は「原生林」と呼ばれているが、江戸時代を通じてヒノキの伐採が行われた。 現在の植生を見ると、人家に近い低標高地はツガが優勢な林、高標高地にヒノキ林が残る。 これは搬出に都合のよい近場からヒノキの伐採を行ってきたから。1950年代までの論文 では樹海は「人為の加わった植生」とされてきたが、1967年に青木が原樹海に「原生林」 の名を付した文献が現れ、70年代に「観光資源」としてそのイメージが定着した。 かつては生活の糧を得る場だった青木が原樹海だが、現代の「原生林」イメージは、豊か になった日本人の「原生林を身近に持ちたい」欲求から生まれたものと考えられる。

以上 (文責・下田)